

■今月の特選句

2016年2月

かじられて残りし脛の寒さかな

菅野あたる

十分な暖房もない部屋で脛を抱えて呟く。安月給をつぎ込んだ息子は寄り付きもせん。あいつの暖房の効いたマンション、俺が頭金だしたのに。

オレオレと云うてをるなり初電話

有富洋二

オレオレ詐欺の被害額は、全国で去年一年間に五百億円に達した。「初電話オレオレ詐欺からしかこない」「オレオレに一句授かり初句会」。

存在感妻に知らしむ大噓

吉原瑞雲

熟年離婚は辛うじて免れたものの、家庭内別居。あら生きていたのね、と冗談めかして夫をからかう妻に、ささやかな抵抗と存在を知らせる噓。

盛り上がる圏外に居る小正月

飛田正勝

小正月はつまり女正月ですね。女衆が盛り上がるのは男衆がそこにいないからで、疎外感をもったようだが女正月一日くらい楽しませてあげよう。

着ぶくれの乳房の嵩を量りかね

八洲忙閑

着脹れの部分を割引いて見にゃならん。「目をレントゲンみたいにして見るなんてヤラシイ」などと 非難めいた反応にも、いえ文芸ですからと応酬。

初笑ひ奥歯の金をちらつかせ

柳 紅生

「奥歯の金をちらつかせ」るのは商売に役立つ。ただし、「資金力十分あるけど簡単には金を出さん」なんて、奥歯にもものが挟まったもの言いになる。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

冬空が袴を着て初御空 ・・・スマホに鎮座鏡餅	金澤 健
年忘れ忘れることも忘れみて ・・・忘れることも生き方のコツ	伊藤浩睦
初夢を寝床の中に置き忘れ ・・・取りに戻りて二度寝となりぬ	小川鮎太
水遁の術かも知れぬ蓮の骨 ・・・疑心暗鬼の深みにはまる	伊藤洋二
十日まで楷書で通す初日記 ・・・そんな決意も三日坊主に	井口夏子
炬燵から立つはトイレに行くばかり ・・・尿瓶購入する金のなく	中井 勇
お互いの夫を肴に女正月 ・・・肴はすべて骨抜きとなる	西をさむ
春愁の顔の三枚三面鏡 ・・・それがいつしか自惚れ顔に	梅岡菊子
これしきの雪に都会の右往左往 ・・・貶しながらも東京指向	小林英昭

ああやだやだ年は詰まらぬ方がいい

・・・詰まらぬことをお言いでないよ

赤瀬川至安

年忘れ隣の名を忘れ

・・・あなた・おたくと呼び合つてゐる

久我正明

万両がうらやましいと言ふ千両

・・・羨望いつか向上心に

新島里子

また一つ頼まないのに去年今年

・・・貧富の差なく老いをば支給

細川岩男

■今月の滑稽句

神仏猫の手借りたい初詣 着ぶくれて飄飄歩む老ホーム	青木輝子 青木輝子 青木輝子
【佳作】 静電気指先走る寒早	
凧の風の流れは幅広に 銀杏木の高く聳へ防ぐ風	青山桂一 青山桂一 青山桂一
【佳作】 瀬には音淵は無音の冬なれば	
【佳作】 煤籠電気切られて仕舞ひけり 数へ日や今年の誓ひ不成立	赤瀬川至安 赤瀬川至安
切れ味の鈍くなり果て老の春 地より天へとどけ極月の合唱団	秋月裕子 秋月裕子 秋月裕子
【佳作】 新年会不参加の言い訳何としよ	
次々と類句の並び初句会 靴音はさながら心音冬の真夜	麻生やよひ 麻生やよひ 麻生やよひ
【佳作】 仕事着も晴れ着も真白雪女	
【佳作】 辛口に甘口はさむ女正月 三回の飯は欠かさぬ寝正月	有富洋二 有富洋二
【佳作】 初景色妻の寝顔もその一つ 嫁が君大き歯形を残しけり モナリザに髭を描き足し初笑	飯塚ひろし 飯塚ひろし 飯塚ひろし
三猿の語源そなへて土竜かな	井口夏子 井口夏子
【佳作】 セーターを毛玉カットでリフォームす	
【佳作】 いじめ老いずれ因果の忠臣蔵 忘年会団塊世代みな薬食い	池田亮二 池田亮二
平和なる新年今年限りかも	伊藤浩睦 伊藤浩睦
【佳作】 クリスマスされど日本は神の国	

- | | | |
|------|--|----------------------|
| 【佳作】 | 細菌にノーベル賞の啓蟄日
水仙の視線に竦む朝帰り | 伊藤洋二
伊藤洋二 |
| | 十二月一見客を断らず | 稲沢進一 |
| 【佳作】 | 子どもにも大人にも餅ねばるかな
忘年会忘れし人を思ひ出す | 稲沢進一
稲沢進一 |
| | 五七五や句(苦)作三昧去年今年 | 井野ひろみ |
| 【佳作】 | 這う子でも年玉見れば寄って来し
スキー場子守の祖父母カラフルに | 井野ひろみ
井野ひろみ |
| 【佳作】 | 新年のポストを覗き喪中なり
元旦や昔叫んだ海に立つ
がらんとしており正月のラーメン屋 | 上山美穂
上山美穂
上山美穂 |
| | 曙杉気根りゆうりゆう冬ざる
春の音耳傾けて聞く鴉 | 氏家頼一
氏家頼一 |
| 【佳作】 | 熱爛の指を冷ますに耳の朶(たぶ) | 氏家頼一 |
| | 数え日の書類の失せしままにかな | 梅岡菊子 |
| 【佳作】 | エプロンのひらひら叱る年の暮 | 梅岡菊子 |
| | 腰痛やくさめひとつに身を構へ
行く年の吾子に書きたる約定書 | 越前春生
越前春生 |
| 【佳作】 | 葷酒して眼のらんらんと冬ごもり | 越前春生 |
| 【佳作】 | 恋仲にならんと雪の礫かな
豆まきやポップコーンを拾う鬼
鶯や恋の蕾は開きけり | 岡野 満
岡野 満
岡野 満 |
| 【佳作】 | 七日寝て待てども来ない七福神
金杯で今年の運を使い切り | 小川鈍太
小川鈍太 |
| | 読初に昭和の記憶甦る | 奥脇弘久 |
| 【佳作】 | 二日はや三日坊主と諦める
寒鴉ゴミの回収待ちかねて | 奥脇弘久
奥脇弘久 |

	数の子に目のなき嫁の子が待たれ	加川すすむ
	季語あまたあれどお初の姫始	加川すすむ
【佳作】	連発の嚏を煽る外野かな	加川すすむ
	獅子舞に稚児(ややこ)囁ませる慈愛ぶり	笠 政人
	宝恵籠(ほえかご)の綺麗どころに目を凝らす	笠 政人
【佳作】	湯豆腐の奴踊りを暫し賞づ	笠 政人
	繭ちゃんと春蚕を呼んで絹の里	加藤澄子
【佳作】	去年今年茶碗は茶碗の形して	加藤澄子
	元日の暁雲を分け着陸す	加藤澄子
	年の瀬やさらさら流れ石手川	門屋佐多務
【佳作】	餅つきは女性が主役賑やかに	門屋佐多務
	新年も選句メンバー定番化	門屋佐多務
	袖の無い人はそそくさ慈善鍋	金澤 健
【佳作】	日めくりを三枚破る四日かな	金澤 健
	主婦業に定年のなし年暮るる	川島智子
	我いまだ枯れても散らぬ七変化	川島智子
【佳作】	北風に影もちちんで見えにけり	川島智子
【佳作】	年賀状ソフト頼みの御慶かな	菅野あたる
	はやばやとトイレの神に初詣	菅野あたる
	鉄壁の嘘のほころぶ隙間風	久我正明
【佳作】	来年のメモ書く暦十二月	久我正明
	初風や鉄腕アトムポーズして	工藤泰子
	虎落笛ダースペーダー現るる	工藤泰子
【佳作】	猿山の猿に湯ざめは聞かざりし	工藤泰子
	昨日去年今日は今年と言われても	小泉花子
【佳作】	人並みの生命線や寝正月	小泉花子
	七センチ凹んだ背丈が初詣	小泉花子

- | | | |
|------|---|-------------------------|
| 【佳作】 | 注文の品だけとどくクリスマス
鯛焼もちよつとおだてりやすく泳ぐ | 小林英昭
小林英昭 |
| | 萬福寺普茶料理にて満腹す
布袋尊はお腹丸出し散紅葉 | 佐野萬里子
佐野萬里子 |
| 【佳作】 | 荒走り試飲目当のウォーキング | 佐野萬里子 |
| 【佳作】 | 綻びし爪研ぐことも女正月
熨斗餅や五指のやつれは争へず
風邪熱は恋の火照りに似たるかな | 下嶋四万歩
下嶋四万歩
下嶋四万歩 |
| | 柚子味噌や小言幸兵衛完封し | 壽命秀次 |
| 【佳作】 | 先づ灰汁の退治始める鍋奉行
納め式何度も欠伸噛み殺し | 壽命秀次
壽命秀次 |
| 【佳作】 | はばかりず人寄せつけず大マスク
言ひ訳の言ひ訳する子息白し
添へ書きに絆深めし年賀状 | 白井道義
白井道義
白井道義 |
| | 橙の上手く坐らぬ神の餅 | 鈴鹿洋子 |
| 【佳作】 | 自動ドア開いたばかりに買うセーター | 鈴鹿洋子 |
| | もう一度覗きたくなる薄氷
冬が鎮座しているガラス戸の内側 | 鈴木和枝
鈴木和枝 |
| 【佳作】 | 恋もしたが失恋もした裸木突っ立つ | 鈴木和枝 |
| | 聖戦に神の気持も氷点下 | 高田敏男 |
| 【佳作】 | スキー場口が滑って諍いに
種を蒔く秋田小町にひとめぼれ | 高田敏男
高田敏男 |
| | じゃんけんで負けて春から妻の姓
ヘルパーも小さき老人マスクして | 高橋きのこ
高橋きのこ |
| 【佳作】 | 我輩もノラやになりたし漱石忌 | 高橋きのこ |
| 【佳作】 | 落し物の知らせを受ける初電話
たんちようのなきまねをするをんなかな
寒鴉大阪城を舞ひをるや | 田中 勇
田中 勇
田中 勇 |
| | 獅子柚子のでんと迎へて老舗なる | 田中早苗 |
| 【佳作】 | 小春日に出す雪見舞エルニーニョ
七度目の申年祝ひ汲む年酒 | 田中早苗
田中早苗 |
| | 謔言(うわごと)を問ひ詰めらるる風邪の床
女弟子寝技に喘ぐ寒稽古 | 田村米生
田村米生 |
| 【佳作】 | 番号で呼ばるる銀行年の暮 | 田村米生 |

【佳作】	初売りは爆買いの客ばかりなり 自筆の字一言もなし年賀状 七草を刻んで入れるスパゲティ	津田このみ 津田このみ 津田このみ
【佳作】	大雪やシンガポールのかき氷 関取の席二つ取り冬の駅 ランランラン蘭が咲きなむらんらんらん	土屋泰山 土屋泰山 土屋泰山
【佳作】	賽銭に請取は無し初詣 年頭の所感本音は別に有り どちらとも取れる託宣初占	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	一合で足りる手酌の年酒かな 読初や陽の目まだ見ぬぼつ句集	飛田正勝 飛田正勝
【佳作】	木の葉髪いっそ禿げればば小言 熱爛に銚子持つ手があっち	中井 勇 中井 勇
【佳作】	車座を席卷したる大くさめ ポインセチア真赤な嘘が咲いてゐる	新島里子 新島里子
【佳作】	猿真似をして赤面の初湯かな 初旅や病院までの十五分	西をさむ 西をさむ
【佳作】	誰よりも天守先に初日受く 寒くなくビールと屠蘇ががっぷりよつ ゆがみても画竜点睛福笑い	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	門松もかざりもまがひ許されよ 大試験何度も開ける冷蔵庫 このたびは三泊四日冬将軍	原田 曄 原田 曄 原田 曄
【佳作】	飴色の孫の手持む煤籠 煤逃げの戻り来し卓落ち着かず 天国に近い標高から賀状	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛

	心臓の働き詰めに去年今年 イケメンと電車の窓に初鏡	久松久子 久松久子 久松久子
【佳作】	スピッツに一吠え御慶賜りぬ	
	お財布の紐をゆるます晴着かな 億万の願をかけられ初御空 お地藏様赤い毛糸のお帽子の	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
【佳作】	犬櫓(そり)の息の狼煙や地平線 初鶏の剣抜くときの気合ひ声 刑事の眼紋り図星の弓始	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	着ぶくれと着ぐるみは似て非なるもの 忘年会だれか必ず遅刻する 数へ日や早押回答ボタン欲し	藤森荘吉 藤森荘吉 藤森荘吉
	寒さうにある公園のベンチかな イヨミズキの冬芽はかたく光りある	藤原セツ子 藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	四日から動き出したるマイナンバー	
	冬ならばらしき景色と寒さかな	細川岩男
【佳作】	寒さ故地を這うやうに忍び足	細川岩男
	真っ二つ割れば白菜芯黄色	細川寛子
【佳作】	福袋提げて正月来たりけり 一言の手書きの文字の年賀状	細川寛子 細川寛子 細川寛子
	その音の刃切れよきかな松手入れ 吟行の徘徊となり秋日和	本門明男 本門明男
【佳作】	文豪を書架に眠らせ漱石忌	本門明男
	新玉の檜葉の香りを活けにけり	松井寿子
【佳作】	歌留多とり白き手が飛び脚が飛び 恋歌留多しのぶ思いは声に出で	松井寿子 松井寿子 松井寿子
【佳作】	吉良支持と不支持義士の日の飲み会 光頭と皴にしみ入る除夜の鐘 三角関係か白鳥三羽の密談は	松井まさし 松井まさし 松井まさし
	ぼろのごと蹲り釣る冬の堤	三橋百笑
【佳作】	大根引く大利根無情喰りつつ 布団干す我も干してる頭(かしら)ごと	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑

	らふそくの花絵花色春待てり	宮森 輝
【佳作】	ジーパンの膝のぼっこり春隣 節分の鬼が笑へば子も笑ふ	宮森 輝 宮森 輝
	歳之夜湯船に悔いを浮かべたる 初詣信心うすき父の背	百千草 百千草
【佳作】	初夢の思ひだせない人の顔	百千草
	干し柿も乾燥肌に悩みおり 幼子の玉の涙や山笑ふ	森岡香代子 森岡香代子
【佳作】	猫舌や椀と取り合ふ雑煮餅	森岡香代子
【佳作】	本名に戻り松明の嫁が君 俳句より衣装に腐心初句会 別腹を溢れてしまひ雑煮餅	八木 健 八木 健 八木 健
	凧や子が荒らしとぞ思ひけり	八洲忙閑
【佳作】	流石なる当て字の名手漱石忌	八洲忙閑
	スナックの社長昇格年忘れ	柳 紅生
【佳作】	喰積の一気に年輪増える腹	柳 紅生
【佳作】	新年の女装変身喉ぼとけ 命長豆餅届く一人居に 寒晴や歩行の辛きよたよたと	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	リセットボタンとはいかずこの一年 吹きガラス工房となり蜜柑の木 弾き納め共に築きし夢の音	山下正純 山下正純 山下正純
【佳作】	失って身一つになり年の暮 乗車券見つからぬまま悴める 飽きもせずラジオ体操三ケ日	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	玄関を出る迄もめる初詣 しつかりと着こんできたが冬ぬくし 駅がこむ成人式を出でどどと	山本 賜 山本 賜 山本 賜
	幼児語のちんぷんかんや初電話 猫の名にミルク・プリンや山笑ふ	横山喜三郎 横山喜三郎
【佳作】	ままならぬ前途の予感姫始	横山喜三郎
【佳作】	マイナンバーへのへのもへじまで管理 ふんどしをしめよ十八年明ける	吉原瑞雲 吉原瑞雲